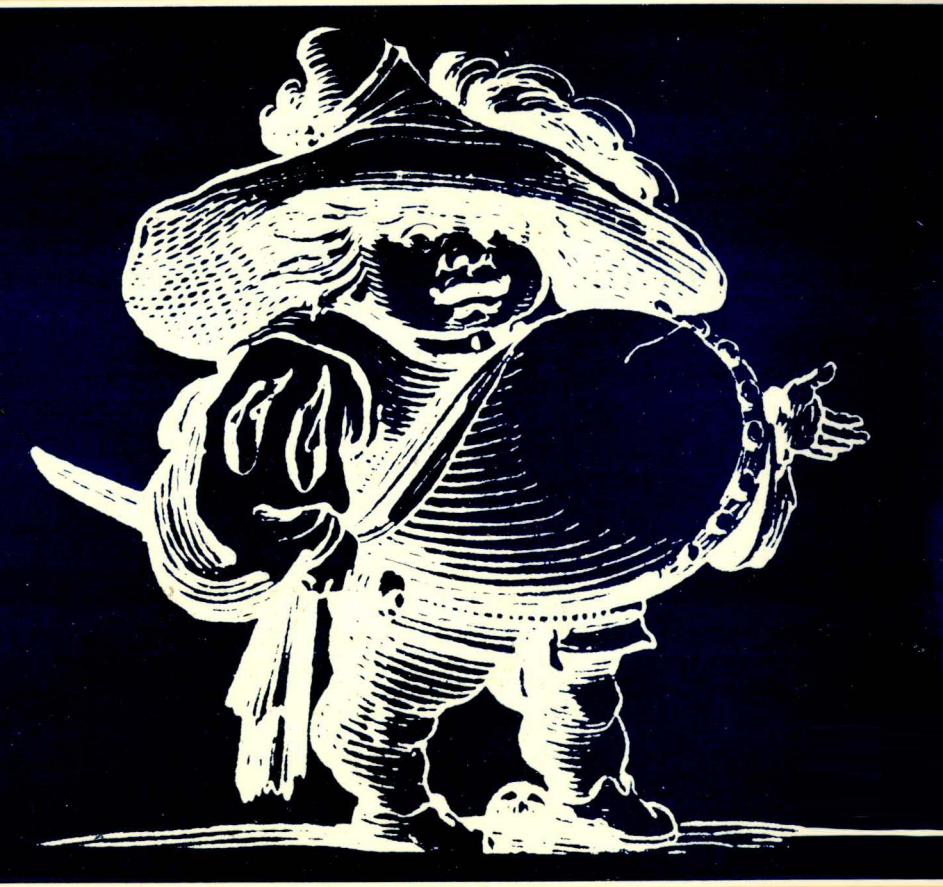
人は獣に及ばず

中野 好夫

みすず書房



人は獣に及ばず

中野好夫

みすず書房

中野好夫
人は獣に及ばず

1982年5月28日　印刷
1982年6月 8 日　発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17－15
電話 814－0131(営業) 815－9181(本社) 振替 東京0－195132
本文印刷所 三陽社
扉・表紙・カバー印刷所 東京美術印刷社
製本所 鈴木製本所

© 1982 Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4－622－00398－8
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目　次

I

人は獣に及ばず……3
私にとっての昭和五十年……8
イワンの馬鹿……12
滅ぶを知ること Memento Mori……16
荘子見レ之、棄二其余魚一……21
漢字名の訓み……24
記者今昔、そのほか……28
曲言する……36
英語教育寸感……41
浮世ばなれたある教育談……46

高風の財界人——伊庭貞剛 …… 50

Ⅱ

よしのずいから …… 65
ゴルフに罪ありや …… 65
まなびの道の幸う国 …… 69
敬老の日　雑感 …… 74
偏痴気談義あれこれ …… 78
〝ヘソ茶〟の江川騒動猿芝居 …… 82
再説、人は獣に及ばず…… …… 86
偶感二束 …… 91
外交スピーチ要諦 …… 95
サファリ動物園と難民 …… 99
奇妙な署名集め …… 103
〝貨殖〟三題咄 …… 108
電話——悪魔の発明品 …… 112
〈大学入試〉よしなし言 …… 116

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

オリンピックと国旗、国歌……121
愉快な愉快な精子銀行……125
NHKの受信料論議……129
奇妙な感慨……133
私の消極哲学……137
元号をめぐって……142
テレビの言葉は空に消える……145
成田開港を前にして——私見……157
沖縄弧の自治権……161
奇襲攻撃ということ——有事立法問題に関連して……165
「制裁」と「奇襲」と——二つの言葉について……169
楽しい期待……174
随想三題……176
お焦げ……176
天皇と退位……177
汚職と東京大学……179

現実的という言葉がはやるとき……181

Ⅲ

物書き不心得帖……187
言葉について……196
目にあまる悪文・難文……224
紙魚独言……233
紙魚の棲み家から……237
「蟬蛻物語」……237
連作小説？「旋風」……243
しおり……249
「鉄条網の中の四年半」……249
「漁村文話」……250
「管理することが教育か」……252
「江馬細香」……253

ある少年向伝記叢書のこと……255
外国の教科書に驚く……261
日記、書簡、回想録等々について……265
明治新聞雑誌文庫とわたし……270
シェイクスピア、コンメディア・デッラルテ、そしてジャック・カロ……273

Ⅳ

阿部知二・人とその仕事と……301
何をいったらいいのか——古田晁君のこと……316
渡辺一夫さんのことども……327
角川源義君のことども……337
山本有三先生を偲ぶ……341
ノーマンさんのことども……346
比嘉春潮氏との別れ……354

惜別、吉川幸次郎君 …… 357
ひとり生まれて、ひとり死す……——故吉野源三郎氏に寄せて …… 363
大宅壮一君とのつきあい …… 377
四十年のつきあい …… 384
ビバ・タケオ！——わが交友録から …… 388
あとがき …… 393

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

人は獣に及ばず

「人は獣に及ばず」――「春波楼筆記」に出る司馬江漢の言葉である。

一日、彼は織田侯隠居というのに招かれて、客となった。座にいま一人相客がいた。オランダの学問技術のことが話題になったらしいが、突然その相客が、お前はオランダのことはよく知っているようだ。だが、このオランダ人というもの、細工には巧みなようだが、要するにあれは「人類にあらず。獣の類なり」と放言したらしい。鎖国時代、公家衆などの口にしそうな放言である。それに対して江漢は、即座に「人は獣に及ばず」と一蹴したというのだ。

司馬江漢というこの人物、別に一流の思想家などと考えるわけではないが、とにかく一癖も二癖もある奇骨の市井人であった。時代に先んじて洋風画、銅版画を描いたり、またどれだけオランダ語ができたか、それはいささか疑問だが、とにかく蘭書を通じて地動説を唱えたり、開国貿易を主張したり、また封建身分制を鋭く批判する人間平等主義の新知識であったことは疑いない。蒙昧の洋人禽獣

論を得々として述べた相客に対する、まことやりきれぬ一言だったに相違ない。

さて、以上がこの言葉のコンテキストだが、近ごろのわたしは、これをもっと広い意味で、人は獣に及ばずとの感慨を深くすることが実に多い。

人間とは、果たしてそんなにえらいものなのであろうか。たとえば自然環境の中での人間の在り方（とりわけ今世紀来の）など、まず考えてみるがよい。獣、いや、動物の方がはるかに美しい調和の中で生きているのではないのか。およそ世に人類ほど邪悪で、残忍で、貪慾で、しかも醜陋な生物は、かつて存在もしなかったし、また将来も断じて存在しえまいとさえ思える。

つい先日もある通信は、バリ・トラの絶滅を報じていた。ジャワ・トラもまた絶滅に瀕しているという。一九六一年から六二年までアメリカの大学で教えていたころのことである。ある科学週刊誌が、なんとかいった野鳥の亜種の一つが、これも絶滅が報じられ、最後の一羽が淋しく剝製にされている姿をのせていた。こうした類のことは、いまや数限りなく起こりつつあるのではないか。すべては人間の残忍性、貪慾性のなせる業である。

たとえば一時、これも絶滅を信じられていた信天翁（あほうどり）が、近年ふたたび生存を発見され、手厚い保護を加えられているなどというのも、たしかに一応の朗報にはちがいないが、保護による保存とはそも何事であるか。すでに調和の共存は完全に失われているのである。それで人類だけは、ひとりその増殖に苦しみ、どうやら世界的食糧危機とやらで、生きのびられるか否かということまで重大な頭痛の種になりかけている。いかに動物性蛋白質が重要栄養源だからといって、いよいよ遠く南極海まで、

いくつかの船団がすでに乗り出しかけているらしい。クジラの食糧までもついに奪おうというのである。一応計画的漁獲などということは口にしているが、いずれは乱獲に結果することは目に見えている。人類の知恵と称すべきか、繁栄というべきか。むしろ貪慾性の演じ出す道化劇ともいうべきであろう。

スピード陶酔にしても同様であろう。ジェット機、新幹線、ともにわたしは大嫌いである。ジェット推進機の発達とともに、わたしの海外旅行は激減した。ジャンボ機などは絶対に避ける。一度としてまだ乗ったことはない。なぜこう急ぎたいのか。国鉄などは、まだリニア・モーターなどというものまで考えているらしい。小さい日本を、なぜそう急ぐ必要があるのか。愚劣である。

戦争――これはもう人類最大の愚行としか言いようがない。第三次大戦にまで発展するか、どうかは別としても、まず次の中東戦争は、必ず近い将来に起こる。現状のかぎり、エネルギー資源の重要性まではわかるにしても、そもそも人類は何を志向しようというのか。大戦のたびに、彼等はあとで戦争の根絶を厳かに誓い合う。だが、現実に行っていることは、つねに戦争抑止力を名とする恐るべき殺人新兵器の開発という一事にすぎぬ。悔いに宿命づけられた生物――その名は人類とでもいうべきか。

もはや現在のわたしは、人類の叡知ということを、あまり信用する気になれぬ。畢竟するに、人間とはそも何者であるのか。もう四十年以上も昔、学校を出てそう間もないころだが、イギリスの高名な物理学者、天文学者ジェームズ・ジーンズの「神秘なる宇宙」という一書を読んで、思わず息をの

んだ記憶がある、久しぶりに埃まみれの蔵書を出して開いてみた。そこには大意次のような一節がある。

広大無際涯の宇宙に比して、地上の生命、まして人間の存在など、いかに偶然気まぐれの所産にしかすぎないか。もともと生命存続が可能なような温度帯というのは、全宇宙空間の中で、いうなれば億兆分の一 a thousand million millionth part にすら足りぬ。そこにたまたま地球が生まれ、生命が芽生え、さらに人間にまで進化するなどというのは、想像をこえた偶然偶発事にしかすぎぬはず。したがって「われわれ人類がこの宇宙に生じたのは、誤ってとはいわぬまでも、完全に偶然の結果として転がり落ちた stumbled into としか思えぬ。この宇宙が、最初から生命の発生を意図して創られたものだなどとは、とうてい考えられぬ。少なくとも生命とは、まったく取るに足りぬ副産物として生じたにすぎぬようである。」そして彼は、さらに六匹の猿が、何十億年間かにわたり、やたらに、盲目的に、タイプライターを打ちつづける光景という失礼な比喩まで持ち出しているのだ。こうした猿のタイプ打ちがつづけば、偶然ひょっと一匹の猿が、あの見事なシェイクスピアのソネット一首を叩き出しているという偶然も、十分ありうる。地球の出現も、そして生命の誕生も、まずはこの盲目的偶然以上には出まい、というのである。

ずいぶんひどい要約にはなったが、考えてみれば、なるほど、そんなものかもしれぬ。目に見えぬ塵の一片にも等しい人類などという生物を生み出すために、この大宇宙が創られたものとすれば、およそ世にこれほど無駄のひどい拙劣な設計者はいまいということになろう。しかも、その微塵にも等

しい人間が、宇宙の君臨者面をしているのである。人は獣に及ばず、その愚や及ぶべからずとでもいうべきか。

何千年後か、何万年後か、それは知らぬが、人類は亡ぶ。必ず亡ぶ。人類滅亡後のこの地球は、いったいどうなるのだ。周知のように、遠い地球の歴史は、その間いくどかの地殻激変（カッカクリュウヘン）を経験している。だが、そのたびに地上を蔽った生物、とりわけ植物は、地下に豊かなエネルギー源となり、次に登場するより高等な生物のために、豊かな繁栄の基盤を準備してきたといえる。だが、人類文明の後はどうなるのか。おそらく破壊しつくされた自然、そして鉄とコンクリートの廃墟の山は、もはや次代の繁栄にとっての豊かな資源を用意しうることなど、絶対にまずなかろう。原始以前の状態に返り、そしてまた将来への可能性も何一つのこさぬ、死塊のような地球だけが、無限広大な宇宙空間の中を、ただ黙々として展転しつづけるのであろうか。まことにいやな想像だが、案外あたらぬともいえなそうである。

1975.1

私にとっての昭和五十年

わたしにとっての昭和時代――ほとんどなんの愛惜もない、考えれば実にいやな五十年だった。大正十五年（師走の数日間だけが昭和元年）に学校を出、社会人となり、数えでいえば厄年の四十二歳で、あの敗戦を迎えた。それからまた三十年余り――いまこれを書いている現在は、ごらんの通りロッキード疑獄が、果してどんな形で結末がつくのか、ほとんど見当もつかぬ奇怪な様相を見せている。これで快い回想をもつなどというのは、最初から無理な話といわねばならぬ。

はじめて社会に出た昭和初期というのは、やがて柳条溝事件（旧満洲事変）の陰謀へと突入する昭和不況時のドン底で、学校出の就職難は、とうていいまどころの騒ぎでなかった。わたし自身も型通り失職者群の一人になり、家庭教師、ミニ演劇雑誌の編集手伝い、三流私立中の教師などで、なんとか食いつないだ。東大法科出の友人の一人が、どこへ行ってもお断りばかり食い、業を煮やした末か、書きつぶしの美濃半紙履歴書をタコに張り、下宿の二階から空にあげて、わずかに鬱憤を晴らしてい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook